

コロナ禍の成人看護学実習 I における 実習形態の違いによる学生の学びの現状

Current status of student learning due to differences in training styles in “Practicum in Adult I” under COVID-19 Pandemic

伊藤 茉莉子 ・ 遠藤 美穂子 ・ 小倉 真紀
ITO Mariko, ENDO Mihoko, OGURA Maki

岡崎 優子 ・ 阿部 春美
OKAZAKI Yuko, ABE Harumi

キーワード：成人看護学実習 代替実習 シミュレーション教育

Key words : Practicum in Adult, Alternative training programs, Simulation-based education

要 旨

コロナ禍、2020年度成人看護学実習 I において2つの実習形態をとった。学内実習に置き換えられた代替実習には、シミュレーション教育を活用したプログラムを実施した。本研究では臨地実習または代替実習を経験した学生の学びの内容を明らかにし、教育への示唆を得ることを目的とした。学生の実習レポートを分析対象とし KH Coder による計量テキスト分析を行った。結果、学生は実習形態に関わらず【対象理解の重要性】【看護過程の展開を通じた学び】【観察技術の実践を通じた学び】のサブグラフを構成し、看護過程の展開および看護計画に基づく看護実践を学んでいた。しかし【コミュニケーション】に関し、学内群では情報収集の手段として学んでいた一方で、臨地群では医療関係職種と協働することや、患者との人間関係を構築する手段として学びを深めていた。今後の代替実習では、模擬患者との関わりを通じた学修機会を確保する必要性が示唆された。

Abstract

We adopted two training formats for Practicum in Adult I under COVID-19 Pandemic in 2020. For alternative training programs replaced as on-campus trainings, simulation-based educational programs were implemented. This study was conducted for the purpose to obtain educational implications by

clarifying learning content of students who experienced clinical training programs or alternative training programs. KH Coder, a free software for quantitative content analysis or text mining, was used to perform quantitative text analysis on students' practicum report. As a result, it was found that regardless of the type of practice, students learned the nursing process and nursing practice based on the nursing plan by constructing subgraphs of "importance of understanding the subject", "learning through the development of the nursing process", and "learning through the practice of observation skills". In the area of "communication", however, it was shown that while the students in on-campus training group were learning from perspective of a mean to gather information, the students in clinical training group were deepening their learnings as a mean to collaborate with other healthcare professionals and building relationship with patients. Our study suggests that learning opportunities through interactions with simulated patients should be secured in the future alternative trainings.

I. 緒言

2020年度以降 COVID-19 感染拡大の影響により、実習施設の学生の受け入れが制限され、A短期大学看護学科における臨地実習の一部または全てを学内・遠隔での実習に置き換えることを余儀なくされた。この状況に対し、実習中止、休講等の影響を受けた学生等と影響を受けていない学生等の間に修学の差が生じることがないように配慮すること [1] や、臨地実習における学修の担保のために、可能な限り臨地に近い状況を設定したシミュレーション教育の必要性について示された [2]。

看護基礎教育におけるシミュレーション教育は、看護の対象が多様性と複雑性を増し、看護者には様々な場面で人々の身体状況を観察・判断し、状況に応じた適切な対応ができる看護実践能力が求められている [3] 一方で、カリキュラムの過密化や患者の権利に対する意識向上や安全の確保の観点により、臨地実習において看護技術等を実践できる機会が減少している状況にあり、看護実践能力を強化するアクティブラーニングやシミュレーション教育の取り組みが期待されている [4]。看護学生を対象にしたシミュレーション教育の実施領域は、成人看護学領域における周手術期場面での実施が多く、実習前の準備教育としての位置づけが多いことが報告されている [5]。

2020年度成人看護学実習 I においても一部、

臨地での実習が制限され代替実習として学内実習に置き換えられた実習に、シミュレーション教育を活用したプログラムを計画し実践した。本研究では、臨地実習または代替実習を経験した学生の実習レポートから学びの内容を明らかにし、教育上の示唆を得ることを目的とする。

II. 本研究における用語の操作的定義

シミュレーション教育：「実際の患者に提供する医療を想定して学習者に教材を提供し、医療者として必要なテクニカルおよびノンテクニカルな能力の向上を目指すもの」 [6]

代替実習：「実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を習得する実習」 [7]

III. 成人看護学実習 I の概要

1. 成人看護学実習 I の位置づけとねらい

成人看護学実習 I は基礎看護学実習に続く実習で、慢性的な健康問題を持つ成人患者を受け持ち、患者・家族との人間関係に基づき、看護問題を明らかにし、看護過程を展開できることを目指す実習である。また、医療チームの一員としての役割を理解し、看護学生としての倫理感と責任を認識して行動できることを目指している。実習は2年前期に配当され集中的に開講されている。実習期間は3週間（3単位）である。

2. 変更された学生配置および実習形態、実習方法

実習施設と調整の結果、代替実習を行う学内群と予定通り臨地実習を行う臨地群の2つの実習形態をとった。また実習形態に関わらず、実習前の学習準備期間として、1週目をすべて学内での実習に変更した。

3. 代替実習における事例設定と設定理由

実習目標が達成されるよう実習内容および方法について検討した。事例は阿部〔8〕のシナリオ集を参考に2事例を設定した。

1) 事例の設定

〈事例A〉2週目の5日間で受け持ち実習を実施した。事例は30歳代女性、胃潰瘍のために入院した患者とし、内視鏡的止血術を受ける患者のクリニカルパスを自作した。患者の安静期間中は輸液管理とバイタルサイン測定や症状の観察、全身清拭を実施、症状が安定し退院される患者に対して退院指導を実施した。

〈事例B〉3週目の3日間で機能別実習を実施した。事例は90歳代男性、誤嚥性肺炎のために入院した患者とした。基礎情報から患者の状態を把握した上で、生活行動の援助として口腔ケア等を実施した。

2) 事例設定の理由

事例Aは、社会的な役割を担い生活する中で健康が障害された成人とした。学生は疾患に合わせた看護過程を展開する初めての实習であったため、一般的な経過を辿る回復期とした。事例Bは、臨地実習で見学や実施する機会が多いと考えられる生活行動援助技術を経験できるよう設定した。

3) 代替実習におけるシミュレーション教育の活用

事例Aについては、受け持ち期間、経日的に患者情報を変化させるよう経過表および実習課題を準備した。シミュレーション場面の共有や指導内容の統一化を図ることを目的に、教員用ガイドを作成し実習を担当する教員間で共有した。教員用ガイドには、シミュレーション各場面における学習目標等を示した。学生を5グループに編成し、実習指導は1グループにつき1名の教員が担当し

た。教員はファシリテーターを担いながら必要に応じて実習指導者役や患者役を演じ分けた。

IV. 方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究デザイン

2. 対象

2020年度にA短期大学看護学科に在籍し、成人看護学実習Iを履修した学生85名

3. データ収集期間

2020年8月～2020年9月

4. 分析方法

学生が記述した実習レポート「実習を通して学んだこと・感想」を分析対象とし、代替実習を経験した学生を学内群、臨地実習を経験した学生を臨地群とし2群に分けた。実習の成績判定が終了した後に、実習レポート内の個人が特定される情報を削除しデータの匿名化を図り、テキストデータ化した。樋口〔9〕が開発したKH Coder-3を用いて内容の分析を行った。形態素解析を行い上位150語の抽出語により全体を把握した後、出現回数が20回以上の抽出語を対象に、それぞれの語のつながりを確認するために共起ネットワークを描画した。抽出語がどのように使用されているか確認するため、レポートの原文を参照した。研究者のうち4名はKH Coderの研修を受講、分析の経験がある。

5. 倫理的配慮

実習の成績判定終了後、研究対象者に研究の目的と個人が特定されないようデータ処理すること、研究への参加は自由意思に基づくものであることを説明し同意を得た。本研究において開示すべき利益相反はない。

V. 結果

対象学生85名のうち、実習開始後に実習形態

を変更した1名を除き、84名（学内群25名、臨地群59名）のレポートを分析対象とした。

1. 実習形態の違いによる学びの視点

総抽出語数は、臨地群42,602語、学内群18,389語であった。両群ともに最頻出語は「患者」であり、頻出語上位20語のうち18語は「看護」「実習」「考える」「学ぶ」「必要」「ケア」「観察」「援助」「情報」等の語が共通して出現していた。

2. 実習形態ごとの特徴

抽出語の出現頻度と関連性を示すために共起ネットワークを描画した(図1)。共起ネットワークは共起関係を線で示した図であり、図における円の大きさは出現回数を、線の太さは共起関係の強さを示している。出現パターンが似通った語はグループ化され、これをサブグラフといい、サブグラフごとに点線で囲み、学内群・臨地群それぞれに1から番号を付記した。さらに抽出語の関連の強弱をみるためにJaccard係数を図中に示した。Jaccard係数は0から1までの値をとり、1に近づくほど関連が強いことを意味する。サブグラフに含まれる語を整理し意味内容を要約した。中心となるサブグラフの要約を【 】, 抽出語を〔 〕、レポートの抜粋を〈 〉で示した。

1) 代替実習での学び

代替実習を経験した学内群では、分析対象となった語は52語であり、6つのサブグラフが抽出された。

(1) 【看護過程の展開を通じた学び】

サブグラフ1には、〔患者〕〔学ぶ〕〔実習〕〔行う〕〔実施〕などの語のまとまりがあった。学生は〈個別性のある看護計画を立案し実施することができた〉等の記述があり、看護過程の展開を通して立案した援助計画を実践し、課題を見出していた。

(2) 【対象理解の重要性】

サブグラフ2には、〔考える〕〔必要〕〔理解〕〔感じる〕〔大切〕等の語のまとまりがあった。〈今患者にとって何が重要なのかを理解し、患者と向き合っていくことが重要であると感じた〉等の記述

があり、学生はシミュレーションを通して、対象を理解することが重要であると学んでいた。

(3) 【観察技術の実践を通じた学び】

サブグラフ3では、〔観察〕〔バイタルサイン〕〔測定〕〔状態〕〔合わせる〕等から構成されていた。〈観察項目は患者にとってどのような意味を持つのかを、疾患が持つ根拠に基づいて考えることが必要〉等とあり、学生は意図的な観察の重要性や得られた情報をアセスメントして患者の状態を把握することを学んでいた。

(4) 【情報収集の実践を通じた学び】

サブグラフ4では、〔情報〕〔アセスメント〕〔コミュニケーション〕〔声〕〔出来る〕等から成り立っていた。〈コミュニケーションで得られた情報をアセスメントする必要性を学んだ〉〈情報収集することばかりに意識が向き、質問ばかりのコミュニケーションになってしまった〉と記述されており、学生は情報収集の手段としてのコミュニケーションについて学んでいた。

(5) 【安全な看護技術の提供】

サブグラフ5では、〔看護〕〔援助〕〔ケア〕〔全身清拭〕〔安全〕から構成されていた。〈患者にとって一番安楽に、安全に行えるのか意見を出して実際に比べてみることができた〉等とあり、学生は生活行動援助技術の実践場面から、個別性にあった援助や安全に配慮する具体的な方策を学んでいた。

(6) 【退院指導の実践を通じた学び】

サブグラフ6では、〔退院指導〕〔生活〕〔指導〕〔説明〕〔分かる〕等の語のまとまりがあった。〈入院前の生活状況を把握したうえで退院指導を行うことが重要であると学んだ〉との記述があり、学生は受け持ち患者の退院指導の実践を通して個別性を捉えることや、対象の理解が得られる指導の必要性と難しさを感じていた。

2) 臨地実習での学び

臨地群では、分析対象となった語は124語であり、13のサブグラフが抽出された。

(1) 【対象理解の重要性】

サブグラフ1では、〔必要〕〔考える〕〔感じる〕

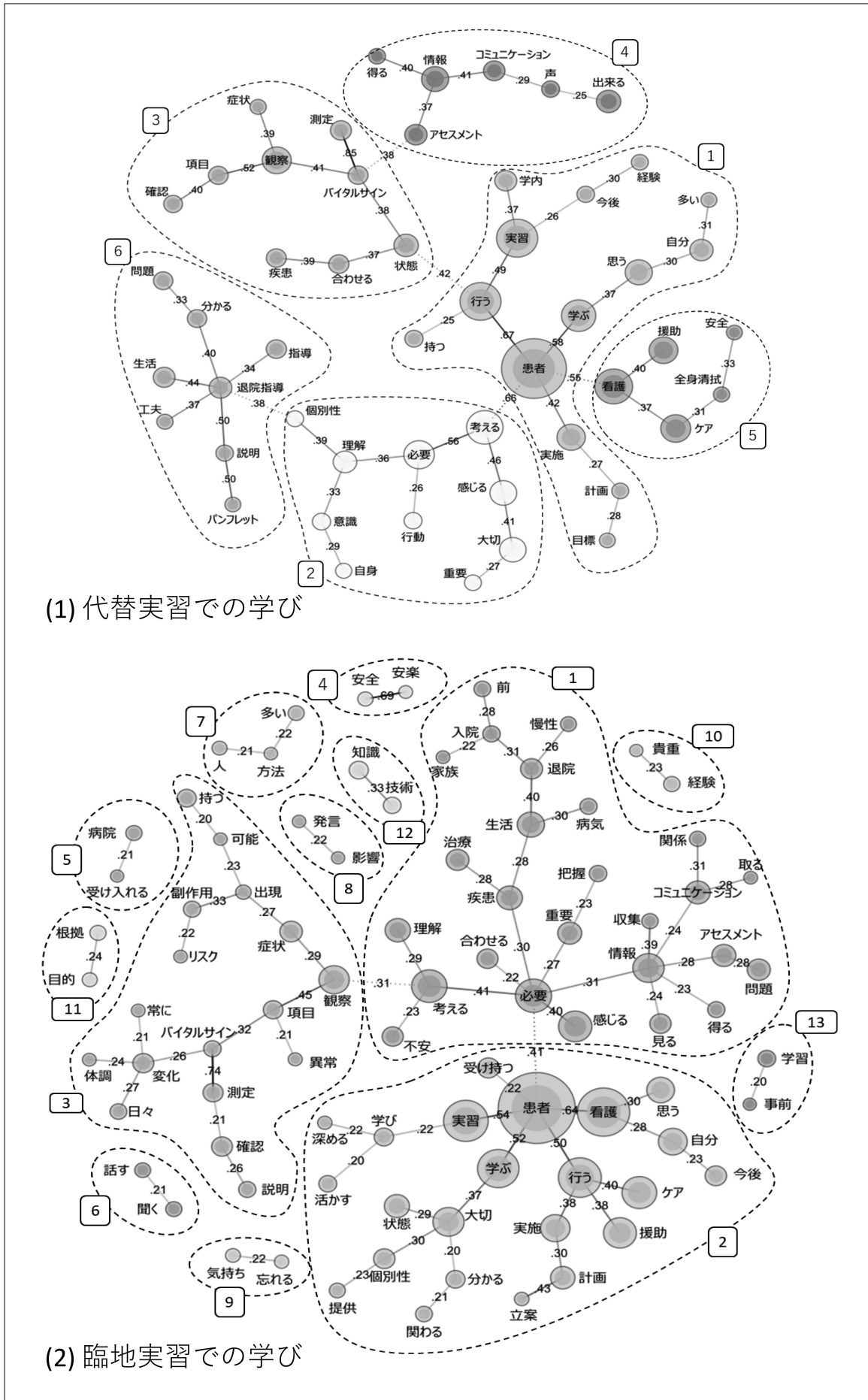


図1 成人看護学実習 I における学びの共起ネットワーク

〔情報〕〔生活〕等の語のまとまりがあり、学内群のサブグラフ2【対象理解の重要性】および4【情報収集の実践を通した学び】と似た構成を示した。〈患者はステロイドを内服しており、それによる重大な副作用を考える必要があった〉等、受け持ち患者との関わりから具体的な学びを得ており、対象を理解し適切な看護を提供する必要性を学んでいた。また学内群サブグラフ4と臨地群サブグラフ1に共通して出現する〔コミュニケーション〕に共起する語をみると、臨地群では〔関係〕〔取る〕と繋がりを示した。〈指導者とコミュニケーションを取り、何時に何を行うのかなどの報告連絡相談を確実にすることも非常に大切〉〈患者との関係を損なわないようなコミュニケーションも意識する必要があるのだと感じた〉等の記述から、医療関係者とのコミュニケーションの重要性や患者と看護者との関係性を構築する手段としてのコミュニケーションについても学びとっていた。

(2) 【看護過程の展開を通した学び】

サブグラフ2では、〔患者〕〔看護〕〔実習〕〔行う〕〔学ぶ〕等の語のまとまりがあり、学内群のサブグラフ1【看護過程の展開を通した学び】と似た構成を示した。〈陰部洗浄、シャワー浴などの清潔ケアの実践を行った〉等という具体的な生活行動援助技術の実践や、〈患者の考え方・感じ方・生活スタイル・意思を尊重し、その人に合った実施方法を見つけていくことが求められる〉というように対象の個別性に合わせた看護過程の展開や看護援助の実践を学んでいた。

(3) 【観察技術の実践を通した学び】

サブグラフ3では、〔観察〕〔症状〕〔バイタルサイン〕〔測定〕〔変化〕等からの語のまとまりがあり、学内群のサブグラフ3【観察技術の実践を通した学び】と似た構成を示した。〈患者の身体の変化を知るためには日常生活での様子やバイタルサイン測定など、多くの情報や観察が必要となる〉〈放射線療法や化学療法の副作用、それに対する観察について詳しく学ぶことができた〉等の記述があり、疾患に関連した症状の観察のみならず、治療経過に伴う副作用の出現にも留意した観

察の視点を学び、実際に観察し状態を把握することを学んでいた。

(4) その他のサブグラフ

サブグラフ4～13では〔安全〕と〔安楽〕、〔知識〕と〔技術〕など、2～3語の繋がりによるサブグラフが形成されていた。

VI. 考察

1. 各群に共通した学び

実習形態に関わらず【対象理解の重要性】【看護過程の展開を通した学び】【観察技術の実践を通した学び】に関し共通した学びが示された。〈個別性のある看護計画を立案し実施することができた〉〈患者の考え方・感じ方・生活スタイル・意思を尊重し、その人に合った実施方法を見つけていくことが求められる〉等、対象との関わりやカルテから得られた情報をアセスメントし、個別性のある看護計画を立案し、さらに対象に合わせた方法で看護援助を行うことができ、両群ともに実習目標である「成人期にある対象のアセスメントができる」や「看護計画に基づいた看護実践ができる」が達成されたと考えることができる。

両群のサブグラフの構成には類似性が認められたが、それぞれの群における語の出現方法の一部に差異が認められた。学内群では抽出された語が52語と少なく、サブグラフは【看護過程の展開を通した学び】【対象理解の重要性】【情報収集の実践を通した学び】【安全な看護技術の提供】【退院指導の実践を通した学び】で構成されており、代替実習の内容を検討した教員の意図した通りの学びが得られていた。教員の意図した内容とはすなわち、成人期にある対象のアセスメントができ、看護計画に基づいた看護実践ができるという実習目標を達成させることであり、それは実際にシミュレーションを行う時にリアリティを持って再現可能な事例を設定し、限られた教員とシミュレータおよび実習環境の中で、確実に全学生が経験できるように検温や生活援助技術の実践、成人患者に対する指導場面の課題、機能別実習をプログラムした結果、導かれた学びであると考えられ

る。

今回の代替実習で計画したシミュレーション教育は、シチュエーション・ベースド・トレーニングと呼ばれるもので、実際の患者を想定した教材を通して思考の強化を目指すトレーニング [10] である。成人看護学では看護過程の展開とシミュレーション教育のシナリオをリンクさせたシミュレーション教育の実践報告がされ [11]、看護過程の展開にシミュレーション教育を取り入れることは、事例患者のイメージ化と共に、学生の思考力の強化につながり、より臨床に即した看護実践能力の強化につながる [12] とされ、学内群においても実習目標に到達することができたのではないかと考える。

2. 実習形態による学びの違い

臨地群は学内群と比較すると抽出語が多い一方で、共起する語が少なくサブグラフが多く形成されていた。またサブグラフの構成に類似性が認められたが、抽出語をレポートの原文で確認すると、臨地群では疾患や治療経過、ADL 等の多様な背景を持つ患者との関わりに基づいた学びが抽出されていた。臨地群では複数の実習施設や病棟で実習を行い、受け持った患者の特徴も様々であったことから、学生個々が経験した実習場面から学びを深めていたと考えられる。

本実習では、対象者との人間関係の構築や医療チームの一員としての役割を理解し行動することを目標に掲げていたことから〔コミュニケーション〕という語に注目して考察すると、学内群では〈コミュニケーションで得られた情報をアセスメントする必要性を学んだ〉等、容態を聴取する手段の一つとしてコミュニケーションを学んでいた。一方臨地群では、〈指導者とコミュニケーション〉や〈患者との関係を損なわないようなコミュニケーション〉等、情報収集のみならず医療関係職種や患者とのコミュニケーションの重要性についても学んでいた。学内群の学生は、受け持ち患者とコミュニケーションを図る時間に制約があり、検温を実施する状況設定のもと容態聴取や退

院後の生活に関連した情報収集がコミュニケーションの中心になっていた。さらにコミュニケーションの対象も、教員が実習指導者・患者役を演じ分けていたものの、学生から見ると教員という同一人物であり、学内群の学生はコミュニケーションに関わる学びが限局していたことが推測される。

3. 教育への示唆と今後の課題

今後も新興感染症やそれに伴う社会状況の変化等により代替実習を行う可能性があることや、臨地実習の準備および統括として学内実習の充実が求められている。今回の代替実習では学内群で〔コミュニケーション〕の学びが限局していたことが示唆された。患者役を教員が担うことについて、学生は教員を患者と思えず、情報収集や計画の実施に抵抗感を抱く [13] ことが報告されていることもあり、代替実習において、患者と看護者の関係性を構築することや医療チームの一員としての態度を学習するためには、第三者による模擬的な患者の存在が必要であるといえる。渡邊ら [14] は、コミュニケーション技術が未熟な学生が、模擬患者とのコミュニケーションを通して、コミュニケーションの重要性を認識し、患者に対する態度を形成できる貴重な機会となり得ると報告しており、模擬患者との関わりを通じた学びの深化が期待される。

VII. 結論

本研究では、臨地実習または代替実習を経験した学生の実習レポートから学びの内容を分析した。

1. 学生は実習形態に関わらず【対象理解の重要性】【看護過程の展開を通じた学び】【観察技術の実践を通じた学び】というサブグラフが構成され、看護過程の展開および看護計画に基づく看護実践を学んでいた。
2. 臨地実習を経験した学生は多様な状況下で学びを深め、〔コミュニケーション〕では医療関係職種との報告・連絡・相談の手段として、ま

た患者と看護者との人間関係の構築の手段として学びを深めていた。

3. 代替実習では、模擬患者を活用した実習プログラムを検討することが課題である。

VIII. 研究の限界

本研究は、実習レポートの分析であり学生の主観的な学びの分析であるため、今後は客観的な評価データとあわせて分析し、看護過程展開能力や看護実践能力等の実習で得られた学びを評価することが課題となる。

文献

1. 厚生労働省ホームページ 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について（令和2年2月28日 事務連絡）。
<https://www.mhlw.go.jp/content/000605026.pdf>
(2022年1月24日引用)
2. 厚生労働省ホームページ 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について（令和2年6月22日 事務連絡）。
<https://www.mhlw.go.jp/content/000642611.pdf> (2022年1月24日引用)
3. 文部科学省ホームページ 看護学教育モデル・コア・カリキュラム（平成29年10月）
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf
(2022年1月24日引用)
4. 厚生労働省ホームページ 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書（平成23年2月28日）
<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf>
(2022年1月24日引用)
5. 今井秀人, 中山由美, 舟木友美, 他: 看護学生を対象としたシミュレータを用いたシミュレーション教育の学習効果、課題に関する国内文献レビュー. 摂南大学看護学研究. 2020; Vol.8, No.1: 46-54.
6. 阿部幸恵: 看護基礎教育におけるシミュレーション教育の導入 基本的な考え方と事例（第1版）. 日本看護協会出版会, 東京, 2018, P15.
7. 厚生労働省ホームページ 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について（令和2年2月28日 事務連絡）.: 前掲注 [1]
8. 阿部幸恵: 1年で育つ! 新人&先輩ナースのためのシミュレーション・シナリオ集 春編（第1版）. 日本看護協会出版会, 東京, 2014.
9. 樋口耕一: 社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－（第2版）. ナカニシヤ出版, 京都, 2020.
10. 阿部幸恵: 前掲注 [6], P15.
11. 尾形裕子, 岩坂信子: 看護基礎教育における周手術期の看護過程にシミュレーション演習を取り入れた効果の検討. 北海道文教大学研究紀要. 2017; 41: 109-118.
12. 村田和子, 福田和美: 成人看護学におけるシミュレーション教育に関する文献検討. 福岡県立大学看護学研究紀要. 2020; 17: 63-70.
13. 桑村淳子, 栗原明美, 中林葉穂, 他: 成人看護実習Ⅱ（慢性期）のオンライン実習における学習効果と課題 実習後のアンケート調査結果より. 順天堂保健看護研究. 2021; 9: 58-65.
14. 渡邊 聡美, 山崎 歩, 中村 もとゑ, 他: 看護基礎教育における模擬患者参加型教育の教育効果と課題 教員の視点から. 日本赤十字広島看護大学紀要. 2016; 16: 21-28.